英文解釈 L01 第 1 講 文の骨格から意味を組み立てる

学習目標

- 主語と述語の中心を確定し、誰・何について何を述べる文かを和訳に反映できる。

解説

主語と述語の対応

英単語の意味を一つずつ知っていても、それだけでは文全体の意味を正しく決められないことがある。同じ単語が並んでいても、文の中で誰が何をする側なのかが変われば、表される出来事も変わるからだ。

大きな句・節は、文中での働きに応じて、名詞〈 〉、形容詞〔 〕、副詞( )で囲んで示す。S/V/O/C/M は文中での役割を表す記号であり、句・節の形そのものを表す記号ではない。

〈The dog〉 chases 〈the boy〉.
S V

（犬が少年を追いかける。）

〈The boy〉 chases 〈the dog〉.
S V

（少年が犬を追いかける。）

2 文で使われている単語は同じだが、追いかける側と追いかけられる側が入れ替わっている。変化したのは単語の意味ではなく、文の中での役割と語順の対応だ。単語を順番に日本語へ置き換えるだけでなく、語句がどのような関係にあるかを確かめる必要がある。

今回扱う基本的な肯定平叙文では、主語の後に述語の中心となる動詞が置かれる。この主語を **S（Subject）**、動詞を **V（Verb）** と表す。S は「誰・何について述べるのか」を示し、V はその S について「どうするのか、どのような状態なのか」を述べる中心となる。

V は、動作を表す動詞だけではない。

The boy runs.（少年は走る。）

この文では、runs が V であり、少年の動作を表している。一方、次の文では、動作ではなく状態が述べられている。

〈The boy〉 is quiet.
S V

V “is” / be 動詞 is も、この文の述語の中心となる V である。

（少年は静かだ。）

この文では、is が V である。be 動詞も文の述語の中心となり、主語の状態を述べる。動詞を見つけるときは、動作を表す語だけを探すのではなく、文の中心として何を述べているかを確かめよう。

©ミライコーチング

解説

また、S は必ずしも名詞 1 語だけではない。

〈The young boy〉 runs .
S V

S “The young boy” / S は The young boy 全体であり、中心語は boy である。

（その若い少年は走る。）

この文では、The young boy 全体が S であり、中心となる名詞は boy だ。young は少年の特徴を加えているが、S の範囲は boy だけではない。主語を見つけるときは、中心語だけで区切らず、主語を構成する語句全体を捉えることが大切だ。

文の骨格を読む出発点は、V を確かめ、その動作や状態が誰・何について述べられているのかを対応させることにある。単語の訳語を並べる読みから、文の中の役割を根拠に意味を組み立てる読みへ切り替えよう。

解説

対象と状態・性質の関係

動詞の後ろに続く語句を、すべて動作の対象だと考えたくなることがある。しかし、後ろの語句が主語の性質や状態を説明する場合もあり、語順だけで役割を決めると英文の意味を取り違える。同じ taste を使った次の 2 文を比べよう。

〈The cook〉 tastes 〈the soup〉.
S V O

（料理人はスープを味見する。）

〈The soup〉 tastes sweet .
S V C

C “sweet” → S “The soup”

（スープは甘い味がする。）

1 文目では、料理人がスープを味見している。動詞 tastes の後ろにある the soup は、味見という動作の対象だ。このように、動詞の対象となる語句を O（目的語） と呼ぶ。

一方、2 文目では、スープが何かを味見しているのではない。sweet はスープの味の性質を表している。ここでの tastes は「味がする」という意味で使われ、sweet は主語 the soup について説明している。このような語句を C（補語） と呼ぶ。C は、主語や目的語がどのようなものか、どのような状態かを説明する働きを持つ。

同じ taste でも、使われ方によって文の中の関係は異なる。単語の意味を一つだけ覚えて機械的に当てはめるのではなく、その文で何を表しているかを確かめることが重要だ。ただし、taste の「味見する」と「味がする」という用法の違いは、構造だけから必ず導けるわけではない。ここは語義と用法を覚えておこう。

©ミライコーチング

解説

さらに、C が説明するのは主語だけとは限らない。

〈The cook〉 keeps 〈the soup〉 warm .
S V O C

C “warm” → O “the soup”

（料理人はスープを温かい状態に保つ。）

この文では、the soup が動詞 keeps の対象であり、warm はそのスープの状態を説明している。つまり、the soup が O、warm が C となる。この文の keep は、スープを温かい状態に保つことを表し、冷たい状態から温かい状態へ変化させたとは述べていない。keep O C＝「O を C の状態に保つ」という語法と、become「〜になる」の過去形 became は、必要な知識として覚えておこう。

O か C かを見分けるには、語順だけでなく、動詞の用法と語句同士の意味関係を確かめる。 何が動作の対象なのか、どの語句が誰・何の性質や状態を説明しているのかを、英文の意味に照らして判断しよう。

解説

骨格と短い修飾語

英文を読むとき、場所や時間を表す語句まで一度に処理しようとすると、文の中心を見失うことがある。次の英文で、まず誰が何をしているのかを確かめよう。

〈The children〉 read books (in the library) (after lunch) .
S V O M M

（子どもたちは昼食後に図書館で本を読む。）

この文の中心は、children・read・books の関係にある。in the library は「図書館で」という場所を表し、after lunch は「昼食後に」という時間を表す。どちらも前置詞とその後ろの語句がまとまりになっており、文の中心に場所や時間の情報を加えている。

解説

場所だけを変えると、次のようになる。

〈The children〉 read books (in the classroom) (after lunch).
S V O M M

（子どもたちは昼食後に教室で本を読む。）

図書館を表す in the library が、教室を表す in the classroom に変わった。読む人、読む動作、読む本、読む時間はそのままで、場所だけが変わっている。

今度は場所を図書館に戻し、時間だけを変えてみよう。

〈The children〉 read books (in the library) (after dinner).
S V O M M

（子どもたちは夕食後に図書館で本を読む。）

after lunch が after dinner に変わり、昼食後から夕食後へと時間が変わった。一方、子どもたちが本を読むという中心の関係と、読む場所は保たれている。

このように、文の中心となる関係を先に確かめ、場所や時間などの追加情報を区別すると、英文の意味を整理しやすくなる。こうした修飾語を **M** と表すことがある。ただし、M だからといって、どの英文でも必ず省略できるとは限らない。骨格を先に確認することは、和訳で修飾語を落としてよいという意味でもない。英文全体を訳すときは、場所や時間を含め、原文にある情報を自然な日本語に反映させよう。

©ミライコーチング

1

The young artist paints colorful signs for the local market.

語注 local：地元の／signs：ここでは看板

a. 主語 S と述語の中心 V の組を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

解説

〈The young artist〉 paints 〈colorful signs〉 (for the local market).
S V O M



図 1　人物・描く動作・看板の関係から、主語・述語の中心と動作の対象を捉える。

a. 構造

最初に、文の中心となる「誰について、何を述べているか」を確定する。主語 S は **The young artist**、述語の中心 V は **paints** である。S は artist だけではなく、young が artist を説明する関係も含めた語句全体だ。ここを正しく捉えることで、「若い芸術家」が文の主語だと分かる。

次に、paints の対象を確認する。**colorful signs** は、芸術家が描く看板を表す。colorful は signs の特徴を加えているため、単に「看板」ではなく「色鮮やかな看板」と読める。

さらに、**for the local market** は「地元の市場向けに」という情報を加えている。ここでは、for 以下を **paints colorful signs** という動作全体に用途・向け先を加える M として読む。名詞 **signs** を後ろから説明する読みも成り立つが、今回の構造表示では動作全体に結び付く読みを採用する。

b. 和訳

直訳

その若い芸術家は、色鮮やかな看板を地元の市場向けに描く。

満点の訳

その若い芸術家は、地元の市場向けに色鮮やかな看板を描く。

訳した後は、英文にある情報がきちんと反映されているかを照合する。「若い芸術家」が主語、「描く」が動作、「色鮮やかな看板」が対象となり、「地元の市場向けに」が用途・向け先を補っている。これらの関係を保てば、日本語として自然な語順に整えても文意は変わらない。colorful は「カラフルな」と訳してもよい。

2

The coach keeps the players calm before the game.

語注 calm：落ち着いた

a. この文の O と C を示し、C が誰・何の状態を説明するかを示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

解説

〈The coach〉 keeps 〈the players〉 calm (before the game).
S V O C M

C “calm” → O “the players”

a. 構造

この文では、動詞 keeps の後ろに the players と calm が続いている。ここで注目したいのは、calm が選手たちとは別の動作の対象を表しているのではなく、選手たちがどのような状態にあるかを表している点だ。

O は **the players**、C は **calm** である。calm が説明しているのは、主語の coach ではなく、O である the players だ。動詞 keep は、この形では「O を C の状態に保つ」という関係を作る。つまり、コーチが選手たちを落ち着いた状態に保つという意味になる。

また、**before the game** は「試合前に」という時間を表す。コーチが選手たちをどの状態に保つのかという関係と、その時間情報を分けて捉えよう。

b. 和訳

直訳

そのコーチは、試合前に選手たちを落ち着いた状態に保つ。

満点の訳

コーチは試合前に、選手たちを落ち着いた状態に保つ。

訳では、the players を「選手たち」、calm を「落ち着いた状態」として対応させている。ここで、選手たちがもともと慌てていたことや、コーチが彼らを落ち着かせたという変化までは英文に書かれていない。keep O C は状態を保つことを表し、必ず状態を変化させるという意味ではない。この文では、O と C の関係を正しく捉え、試合前という時間も含めて訳すことが大切だ。

©ミライコーチング

演習問題

1

The students clean their classroom together after lunch.

a. 主語 S と述語の中心 V の組を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

2

The garden is quiet in the early morning.

a. 主語 S と述語の中心 V の組を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

3

The driver carries a heavy box into the small shop.

a. 動詞 carries の対象となる語句（O）を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

4

The leaves became yellow after a cold week.

語注 leaves：leaf「葉」の複数形／became：become「〜になる」の過去形

a. 補語 C を示し、それが誰・何の性質や状態を説明するかを示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

5

The girl reads a letter beside the window.

語注 beside：〜のそばに／で

a. 主語 S と述語の中心 V の組を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

6

My older brother walks the dog every evening.

語注 walks：ここでは「〜を散歩させる」

a. 主語 S と述語の中心 V の組を示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

演習問題の解答・解説

1

〈The students〉 clean 〈their classroom〉 together (after lunch).
S V O M M

a. 構造

主語 S は **The students**、述語の中心 V は **clean** である。主語は「誰が」に当たる語句全体を捉える。この文では students が主語の中心であり、clean がその主語について述べる動詞となる。主語が複数の students なので、現在形の動詞は clean となっている。

b. 和訳

直訳

生徒たちは、昼食後に一緒に自分たちの教室を掃除する。

満点の訳

昼食後、生徒たちは自分たちの教室を一緒に掃除する。

their classroom は「自分たちの教室」、together は「一緒に」、after lunch は「昼食後に」を表す。これらの情報を自然な日本語の順序に整えながら、誰が、何を、いつ、どのようにするのかを保つ。例えば「昼食後、生徒たちは一緒に自分たちの教室を掃除する」としてもよい。

2

〈The garden〉 is quiet (in the early morning).
S V C M

C “quiet” → S “The garden”

a. 構造

主語 S は **The garden**、述語の中心 V は **is** である。ここでは動作を表す一般動詞ではなく、be 動詞の is が述語の中心となっている。V を見つけるときは、動作を表す語だけでなく、主語について状態を述べる be 動詞も確認する。

b. 和訳

直訳

その庭は、早朝には静かだ。

満点の訳

その庭は早朝には静かだ。

quiet は庭の状態を表し、in the early morning は「早朝に」という時間を加えている。「早朝、その庭は静かだ」という訳も可能だ。庭が何かをするという意味ではなく、庭がどのような状態なのかを述べる文として訳す。時間の情報も落とさず、英文全体の意味を反映させよう。

©ミライコーチング

3

〈The driver〉 carries 〈a heavy box〉 (into the small shop).
S V O M

a. 構造

動詞 carries の対象となる O は **a heavy box** である。box だけでなく、冠詞 a と形容詞 heavy を含む語句全体が対象を表している。heavy は box の特徴を説明しているため、O を答えるときは中心語だけを抜き出さず、対象となる名詞句全体を示す。

b. 和訳

直訳

その運転手は、重い箱を小さな店の中へ運ぶ。

満点の訳

その運転手は重い箱を小さな店の中へ運ぶ。

a heavy box は「重い箱」、into the small shop は「小さな店の中へ」という方向を表す。into 以下は単に店の場所を示すだけでなく、箱がどこへ運ばれるのかを示している。「その運転手は小さな店の中へ重い箱を運ぶ」と語順を整えてもよい。箱の重さと移動の方向を保ち、原文にない動機や状況は付け加えない。

4

〈The leaves〉 became yellow (after a cold week).
S V C M

C “yellow” → S “The leaves”

a. 構造

補語 C は **yellow**、それが説明する主語 S は **The leaves** である。yellow は葉の性質・状態を表しており、「黄色い」という内容が主語の leaves に結び付いている。動詞 became は「〜になった」という変化を表すため、葉が黄色い状態になったと読む。yellow を動作の対象として捉えるのではなく、主語がどのような状態になったのかを確認することが判断の根拠となる。

b. 和訳

直訳

その葉は、寒い一週間の後に黄色くなった。

満点の訳

寒い一週間が過ぎた後、葉は黄色くなった。

became の過去の意味を「〜になった」と訳し、after a cold week の時間情報も「寒い一週間の後」として残す。「寒い一週間が過ぎた後、葉は黄色くなった」という訳も可能だ。ただし、寒さが黄色くなった原因であるとは英文に明示されていない。また、葉が以前は緑色だったという情報もないため、訳に付け加えない。

5

〈The girl〉 reads 〈a letter〉 (beside the window).
S V O M

a. 構造

主語 S は **The girl**、述語の中心 V は **reads** である。girl は、この文で述べる対象となる人物を示し、reads はその人物の動作を表す。主語は girl だけでなく、冠詞 The を含めた語句全体で捉える。V を確定すると、誰が何をしている文なのかを正確に読み始められる。

b. 和訳

直訳

その少女は、窓のそばで手紙を読む。

満点の訳

少女は窓のそばで手紙を読む。

a letter は「手紙」、beside the window は「窓のそばで」という場所の情報を表す。「窓のそばで、その少女は手紙を読む」としても意味は保たれる。日本語では語順を調整できるが、少女が読むという関係と、読む対象が手紙であること、窓のそばという場所を落とさないようにする。

6

〈My older brother〉 walks 〈the dog〉 (every evening).
S V O M

a. 構造

主語 S は **My older brother**、述語の中心 V は **walks** である。S は brother だけではなく、My と older を含む語句全体だ。older は兄が年上であることを示し、walks が主語について述べる動作の中心となっている。

b. 和訳

直訳

私の兄は、毎晩犬を散歩させる。

満点の訳

私の兄は毎晩、犬を散歩に連れて行く。

walks the dog はこの文では「犬を散歩させる」という意味になる。every evening は「毎晩」と、動作が繰り返される時間を示している。「兄は毎夕、犬を散歩に連れて行く」という訳も自然だ。訳では、兄が動作をすること、犬を散歩させること、毎晩繰り返すことを保つ。英文にない散歩の目的や兄の感情、散歩の手段などを付け加える必要はない。

©ミライコーチング